

曲目解説

ガブリエル・フォーレ Gabriel Urbain Fauré : レクイエム

フォーレは1845年に南フランスで生まれ、幼時から宗教学校で教育を受けた。教会オルガニスト、楽長としての職務を務め、パリ音楽院の作曲科教授となった。その間、数々の室内楽、ピアノ協奏曲、歌曲を作曲。1924年に弦楽四重奏を完成し、79歳の同年11月4日パリで永遠の眠りについた。

フォーレのレクイエムは近代的な調性感覚に立ちながらも、その調性を曖昧にし、教会調特有の柔らかい叙情的な雰囲気醸し出している。彼の作曲技法の形式は中世音楽の強い影響を受けており、とくにこの「レクイエム」の構成は中世カトリック教会音楽の伝統を踏襲し模倣しているが、近代的な叙情性の濃い、優雅さに満ちた音楽を創造している。内容的にもその高雅さ平安さはカトリック教会の死に対する観念をよく表現している。



- I INTROÏT et KYRIE 入祭唱とキリエ
死者の永遠の安息を神に嘆願する祈りが荘厳に唱われる。
- II OFFERTOIRE 奉献文
神に犠牲を捧げ、死者を罪と地獄から免れさせ給えと祈願して、バリトンが柔和な旋律を独唱する。
- III SANCTUS サンクトゥス
聖なる神の栄光を称えて、交唱の合唱がおさまると「オザンナ」と叫び、最後はつぶやくように終わる。
- IV PIE JESU ピエ・イエズ
再びイエスに死者の安息を祈願して、ソプラノが独唱する魅力ある美しい曲である。
- V AGNUS DEI アニュース・デイ
神の子羊であるキリストに捧げる祈りを、限りない憧憬を示す旋律でテノールが唱う。
- VI LIBERA ME リベラ・メ
死者の罪が許されるための祈りが、バリトンの先導する表情豊かな旋律で唱われる。
- VII IN PARADISUM 天国にて
柩が墓地に運ばれる途中で唱われる聖歌で、最後の安息を込めたものと言われている。ソプラノの透明な柔らかい旋律は、聴く者を敬虔な心情にさせる。これは他のレクイエムと異なる特徴で、作曲をした理由は最愛の父に安息の祈りを求めたのかも知れない。

佐藤 眞:混声合唱のための組曲「旅」

佐藤 眞は1938年8月24日に茨城県水戸市で生まれ、1961年に東京藝術大学音楽学部作曲科を卒業し1963年に同専攻科を修了している。東京藝術大学音楽学部教授を2000年に退官している。代表曲には合唱コンクールでも幅広く歌われている「大地讃頌」(組曲「土の歌」の終曲)などがある。混声合唱のための組曲「旅」は「蔵王」と同じ作法で書かれており、多くの合唱団に愛唱されている。

1 旅立つ日 2 村の小径で 3 旅のよろこび 4 なぎさ歩めば 5 かごにのって 6 旅のあとに
7 行こうふたたび の7曲で若者の旅立ちからいろいろと経験をして、ふたたび希望にもえ明るい未来に向かって旅に行こうとしている様子を歌う。

ウィーンからの贈り物 石丸 寛 編曲合唱曲

ヨハン・シュトラウス2世はワルツの父と呼ばれる同名の音楽家の長男として、1825年にウィーンで生れた。序章と五つのワルツとコーダよりなるウィンナ・ワルツの形式を確立し、美しく青きドナウ、ウィーンの森の物語、皇帝円舞曲などワルツ170曲を残し、ワルツ王として知られる。またポルカやオペレッタを含めて作曲数は500を超える。

今回はTCS創始者石丸寛の編曲、中山知子らの訳詩による日本語版で演奏する。

- 1 美しく青きドナウ 作曲 Joh. シュトラウス
ヨハン・シュトラウス2世が1867年に作曲した合唱用のウィンナ・ワルツで「ウィーンの森の物語」と「皇帝円舞曲」とともに「三大ワルツ」に数えられ、その中でも最高傑作とされる。ウィンナ・ワルツの代名詞ともいわれる作品である。オーストリアにおいては、正式なものではないが帝政時代から現在まで「第二の国歌」と呼ばれている。ドナウ川は山かげの泉から生まれ、谷間を下り村や町を訪れ、恵みを与えて流れる。今も昔も人々の心に喜びを運ぶドナウ川を称えている。
- 2 鍛冶屋のポルカ 作曲 Jos. シュトラウス
ヨーゼフ・シュトラウスは1827年にウィーンで生まれた。ワルツ王ヨハン・シュトラウスの弟にあたる。この曲はヨーゼフ・シュトラウスが1869年に作曲したフランス風ポルカで、金床を楽器として用いることで知られている。朝早くから町の広場に響かせる槌の音は一年中休むことなく働く名物男の鍛冶屋で、大人も子供もみんなから褒められ、村からも町からも頼まれる仕事ぶりと心意気をスタッカートで陽気に歌う。
- 3 メリーウィドウ ワルツ 作曲 F. レハール
フランツ・レハールは1870年にオーストリア＝ハンガリー帝国で生まれ、オーストリアやドイツを中心にウィンナ・オペレッタの分野で活躍した。この曲は1905年に初演された3幕からなるウィンナ・オペレッタの中の一曲で、ダニロとハンナをバリトンとソプラノのソロで歌うものである。美女ハンナと元恋人ダニロのラヴストーリーで、意地を張り素直になれない二人の恋のかけひきが描かれて、最後によくやく結ばれる。
- 4 ピッツィカート ポルカ 作曲 Joh. & Jos. シュトラウス
ヨハン・シュトラウス2世とヨーゼフ・シュトラウス兄弟の二人により1869年の夏に作曲された。この当時二人はロシア旅行に出かけており、その際にサンクトペテルブルクでピアノの連弾をしてこの作品が生まれたといわれている。Tum tum tumと舌先ではじく音でリズムカルに軽快に歌うポルカである。
- 5 春の声 作曲 Joh. シュトラウス
ヨハン・シュトラウス2世が1822年に作曲したウィンナ・ワルツで、アルフレート・グリュンフェルトに献呈されたものである。ピアニストであり親友でもあった当時71歳のフランツ・リストと即興演奏会パーティで同席した時、余興でまとめ上げたといわれている。当時3度目の結婚を果たして、新妻を迎えた喜びや幸福感が曲想に反映されているとの逸話もあるようだ。春は雪が溶けて野も山も谷も希望の色になり、一度に生命がめざめる。春の声を聞けば心も軽くなり、新しい世界を迎える歌である。
- 6 ウィーン我が夢の街 作曲 R. ジーツインスキー
ルドルフ・ジーツインスキーはポーランド系で1879年ウィーンで生まれた。この曲は1914年頃に作曲された。ジーツインスキーはウィーンの歌を多数作曲し、オーストリア作曲家連盟の総裁を務めたこともあり、生涯をウィーン市民として過ごし1952年この地で亡くなった。ウィーンは夜も昼も、年若い人にも若者にも愛される心の故郷であると賛美するノスタルジックな曲である。